

小學
 科用

日本文典

春山弟彦著

卷之一
 卷之二
 上

卷之二之目録			卷之一之目録							
代名詞	形容詞	名詞	詞法	延言約言畧言	音便通音	綴字	呼法	音韻文字	字法	緒言
左二十三	右十三	左二		左二十	左十五	右十一	右七	左二		

ホ 2
 4672
 1



本 2
4672
1

春山第彦著

小學
科用
日本文典

明治十年
二月十三日
版權免許
龍章堂發兌



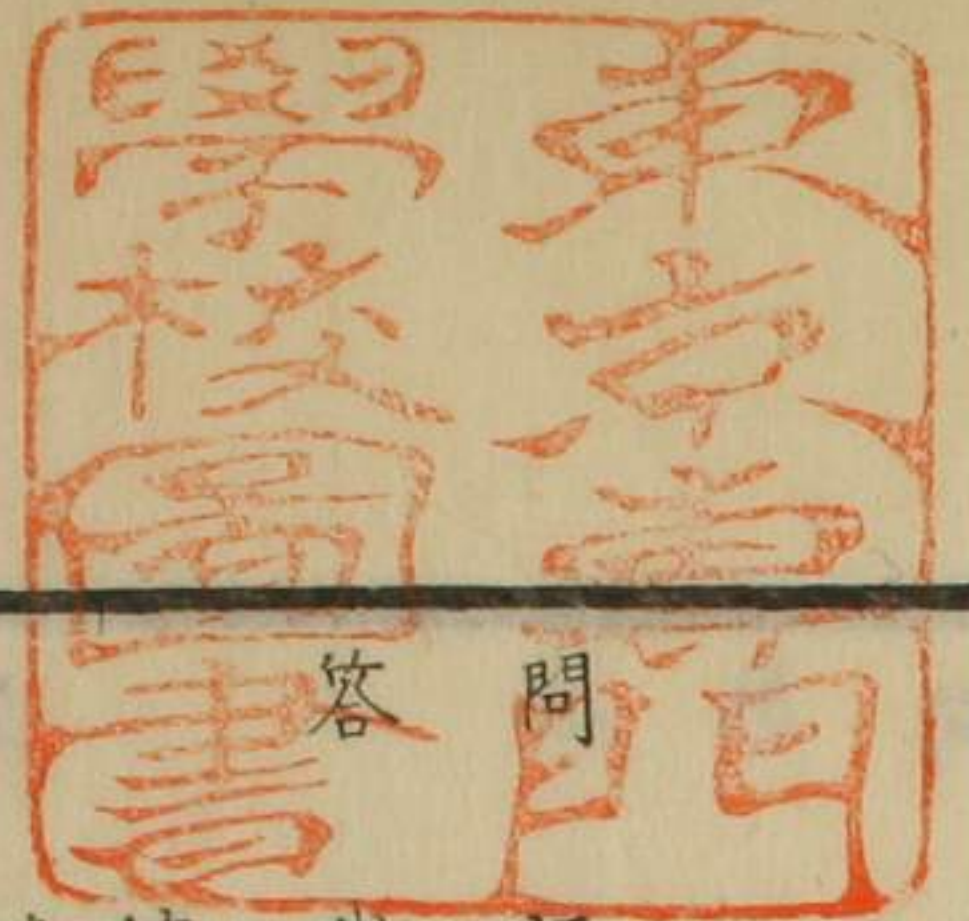


小學科
用日本文典卷之一

明治廿年八月十九日
醍醐 辰寄贈



姫路 春山弟彦 著



川
481

明
499
卷
5

緒言

語學は何の爲め設くる
我日本國同言種の人とつへとも山河をへどて
境界をわつづる多むがひて土音^{イナカコトバ}方言^{コトバ}のさ、ら
訛^{クニナマリ}論^{カキトリ}をきことを得むとをを口語^{ハナシ}談話^{カキトリ}とみかたり
筆語^{カキトリ}(文章)より其述ぶる所をこしく多むがひ
りてこをを一方に解るも他方に通トがと
きこと有るを苦しむ今其憂を避むとて語音を

つらとめ章句をとばつとめて其文を同トく
せしめん為め説くる學を至

問 口語筆語とは

答 人の心より所の事情とまを他の人へ告むと
まるときは聲音と幾し言詞と綴り談話と述べて
思ふ所を達せしむこれを口語といふ又其口語
を字(音聲の符號)と寫し文と作る者これを筆語
といふなり

問 語學は共々幾類に分つ

答 三類あり一は字法二は詞法三は句法これなり
問 字法とは

答 人の音聲と各異の符號を設け符號ととりて音
聲を描き出を者これを字と名づく其字ととり
て言詞を綴ることを示め以法をいふなり

問 詞法とは

答 聲音一個或ハ數個を疊ねて一義をなを者こと
を詞と名づく其詞の品種性質活用等を示めを
法をり

問 句法とは

答 二個以上數個の詞を組織して事を紀し意趣を
述べて説話をかきつらはを者ことまを句と名づ
く其句の體裁及び詞の配合を示めを法をり

字法

問 字法とは

答 音韻文字呼法綴字通音音便延言約言略言等の法を示めして文字の讀法及び用格を知らしむる法なり

音韻文字

問 音韻は共々幾種に分つ

答 清音濁音半濁音鼻音拗音の五種とを其清音は母韻子韻は濁音より下四種はみなりなり

問 清音は幾音より幾字か

答 五十音より四十七字なり五十音圖をみると

五十音圖							
ア行	イ行	ウ行	エ行	オ	母韻		
カ行	キ	ク	ケ	コ	上唇音		
サ行	シ	ス	セ	ソ	齒音		
タ行	チ	ツ	テ	ト	齒音		
ナ行	ニ	ヌ	ネ	ノ	帶鼻音		
ハ行	ヒ	フ	ヘ	ホ	唇音		
マ行	ミ	ム	メ	モ	唇音		
ヤ行	ユ	ヨ			二重母韻		

ラ行	ラ	リ	ル	レ	ロ	上腭音
ワ行	ワ	ヰ	ウ	エ	ヲ	二重母音

ヤ行イ列の音は母韻のイ近クヤ行エ列の音及びワ行ウ列の音は母韻のウエ近故ニ別ニ字を製らば

濁音は

問

答

二十音とりて別ニ字を作らば清音の字を用ふ
又(イ)の符號を加へてこれを識別をることとり
濁音圖をみよ

濁音圖

カ行	ガ	キ	グ	ゲ	ゴ	上腭音
サ行	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	齒音

タ行	ダ	チ	ツ	テ	ト	齒音
ハ行	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	唇音

問

答

半濁音は
十音とりて別ニ字を製らば清音の字を用ふ又
(イ)の符號を加へてこれを識別をることとり半
濁音圖をみよ

半濁音圖

カ行	カ	キ	ク	ケ	コ	上腭音
ハ行	パ	ピ	プ	ペ	ポ	唇音

問 鼻音ハ

答 ンの一音なりランケンテン等のンよして詞の上ニ在ることなり

問 拗音ハ

答 二重母韻を他の子韻と合せて急ニ呼ぶ時生じたる音なりこれハ他の音の如く單一の音よりらびして重複の音なりナヤミユチヨクワクエスキ等の如く外國より傳來せる者多し

問 母韻とハ

答 元來聲といふことよりして唇齒を用るごとく出る音をなはちア行の五音なり又ニ重母韻とい

ふ者ありヤ行ウ行の十音なりとまは母韻の重りたる者よりて假令はヤハイアエアの合音ワハウアオアの合音をろが如くして其他の諸音は必是ア行の音の唇齒腭鼻等ニ觸れて轉化トとる者なり故にこの五音を母韻と名づく

問 子韻とは

答 元來響といふことよりして母韻を借りて唇齒の上腭を以て聲と共に響く音なり本邦單子韻の字を製らば其母韻ニ配合して全き聲をなす者ニ就きて字を製る故に今より其配合音の者を以て子韻と名づけて母韻とわたり

問 子韻は幾種に分つ

答 三種とを一ニ唇音ニニ齒音三ニ上腭音トトて

この外ニ鼻音トリ其唇齒腭鼻トソヘヨも全き

唇齒腭鼻トリを以て實は唇齒腭鼻の音を帶

ひて母韻と共に響く音を至故ト此を長く引

きて呼へバカチラむ母韻ト歸をヨナリ假令は

ア列の音を引きて呼へはミチアの音ト歸トイ

列の音はミチイの音ト歸をヨを以て知ヨナリ

問 唇音とは

答 ハ行の清音五個其濁音五個半濁音五個マ行の

五音共ニ二十音なり

問 齒音とは

答 ナ行の清音五個其濁音五個ハ行の清音五個其

濁音五個共ニ二十音なり

問 上腭音とは

答 カ行の清音五個其濁音五個半濁音五個ラ行の

五音共ニ二十音なり

問 帶鼻音とは

答 ナ行の五音なり

問 音は悉べて幾個なりて字を悉べて幾個なりや

答 單音は八十一トて其字ハ僅ニ四十八個なり

拗音は字を製ラ以數を定めタ又合音字あり支

那字にり

問 合音字とは

答

メシテ
コト
トキ
キ
トキ
トモ
云イラ
云ト

イフ等の七字なり

問

支那字とは

答

彼國より来る所の文字より一物一事を字

を製を其數萬を以て算を然して我が言語文章

大半其字を挿入を其習慣の因て来ること久し

又其字を用る譯を施して用るあり本音のや

、マ用るにりををハチ松マツ竹タケ梅ウメ

チ仁シン勇ユウの如し

呼法

問

呼法とは

答

長呼短呼疊音四聲等の名稱を立て諸音の呼法

を分つをハチをマ

問

長呼とは

答

聲を長く引きて呼ぶ音より母韻をかぎれり

さてこそ(一)の符跡を徴をるをり假令はア

イウト等の如し又子韻は長く引けばおのづ

り母韻を歸して呼ばるをりサアキイシ

イ等の如し此のなり鼻音のンは其ま、長

く引くことを得るをりアンカー等

問 短呼とは

答 音をつめて急促し呼ぶ時或ハ意をつとめんと
して力をこめて呼ぶ時ハ聲の口中より外
へ出ざる者にして單直に短きものは何らなりて
急促まつまる音なれば實は促呼といひて然る
可き者なりこそら音は(シ)の符を用ること
なり

問 はトめの者ニ屬するは

答 キの音をつめてつふはヒキ、リ引切をヒッキ
リとの音をつめてつふはイヒテ言テをイソテシ
タガヒテ從テをシタガソテフ音をつめてつふは

タフトシ貴シをタフトシチの音をつめてつふは
モチテ以テをモツテタチテ立テをタツテツの音を
つめてつふはヤツコ奴をヤツコリをつめてつふ
けホリス欲スをホッスカヘリテ返テをカヘツテと
つふ類なり

問 第二の者ニ屬するは

答 マタク全クをマツタクモトモ最をモツトモヒチユ
ウ備中をヒツチユウハトリ服部をハツトリとつへ
る類にして力をこめてつふ時ハ第一音と第二
音との間ハ口内音の更ニ加はりて急促し呼は
る者なり

問 短呼音は文章に於ていゝなる時にか用る

答 これハ殊々^ツツヤ^ク聞^ル聲^ヲハ^レ但^言を^向りのまゝ、^ツ志^ルさん^ト志^ル時^ヲ或^ハ支^那文^ヲ直^譯讀^ミく^多を^時々^ニ於^テ用^ルこと^ノほ^ウハ^常の文^ニは^つと^めて^これ^ヲ避^ク可^ク

問 疊音とは

答 同音を疊ね呼ぶ者としてこれハ(一)の符跡を徴^スア、カ、サ、等の如^ク又草體^ニハ(二)の符跡を徴^スア、カ、サ、等の如^ク二音或^ハ三音を^つつ^ねて^疊ね^呼ぶ^時は(三)(四)等の符を徴^スと^きく^向は^スと^きく^向は^スと^きく^向は^スと^きく

問 四聲とは

答 平上去の三聲と入聲とよして音節に緩急低昂^ハを^向は^スと^きく

問 平上去の三聲とは

答 音の緩^ニして^昂ら^ズ降^ラズ^平ら^ウを^平聲^トと^昂る^を上^聲と^降る^を去^聲と^假令^ハ日^ハ平^聲ハ^槌ハ^上聲^ハ火^ハ去^聲なる^ガ如^ク次^ニか^クる^三聲^表を^みと

の み 飲	つ る 弦	は し 橋	と ち 立	よ 世	か し 片	と 戸	は く 履	い る 射	平 聲
の み 蚤	つ る 鈎	は し 端	と ち 太刀	よ 夜	か し 象	と 外	は く 掃	い る 入	上 聲
の み 鑿	つ る 鶴	は し 箸	と ち 館	よ 節	か し 肩	と 砥	は く 吐	い る 煎	去 聲
お ひ 追	ね 寢	つき 月	あ ら 嶽	よ る 絢	か み 神	か き 垣	と き 解	は 羽	平 聲
お ひ 生	ね 音	つき 盡	あ ら 竹	よ る 依	か み 歌	か き 柿	と き 時	は 葉	上 聲
お ひ 菟	ね 根	つき 搗	あ ら 閑	よ る 夜	か み 上	か き 蠣	と き 疾	は 齒	去 聲

三聲表

問 三聲はつねに表の如く一定して變むることな

お き 置	け 毛	こ ひ 戀	け き 飽	け し 蓄	ゆ ふ 夕	め 眼	み 三	も 了 杜
お き 沖	け 蹴	こ ひ 乞	け き 明	け し 足	ゆ ふ 結	め 女	み 見	も 了 威
お き 起	け 氣	こ ひ 鯉	け き 秋	け し 惡	ゆ ふ 水綿	め 芽	み 身	も 了 守
あ き 卷	ふ き 裁	け つ 厚	さ き 咲	さ け 鮭	ゆ き 往	ひ 干	ひ 日	あ き 住
あ き 禎	ふ き 露	け つ 充	さ き 崎	さ け 酒	ゆ き 雪	ひ 晝	ひ 槌	あ き 墨
あ き 蔣	ふ き 吹	け つ 暑	さ き 裂	さ け 避	ゆ き 齋	ひ 蛭	ひ 火	あ き 隅

きう

答 上下のつゞきよをりて平聲とちまち去聲と變

ト上聲かへりて平聲とかはること常なり前問

と答とるが如くひ日は平聲ひ樋は上聲ひ火は

去聲なるをひかげ日影といふ時のひハ上聲

か々ひ懸樋といふ時のひ樋は去聲ひばく火箸

といふ時のひ火は上聲とちまなり

問 入聲とは

答 短促と呼ぶ聲としてをちハち前といふ所の短

呼なりこれより聲の昂低なりて實は平上去の

三聲とわらつ可きはづまきども其音つよりて

分明より難き故とわくくろめてひとつと入聲
と名つけらるなり

綴字

問 綴字とは

答 二個以上數音をくみわはせとる詞を唱ふる時

上下のつゞけぶらとをりて口調ととがひ異

音を發する者なり然るを字とつて詞を綴

るとは其發音のまゝとち多かはをりて正しく

本音の字を以て綴るを法とす又二音のはまを

と近うして後世といとりて相混といま口語と

分ち難きもこれを古と徴して各異の本音を
る可き者あり此二件の者を正して言詞を連綴
をるをかまづらひ綴字法といふなり

問 答

相ちかき音とは
イキ或ハエエ或ハオヲ等を古は音聲正しく
かまづかひも能く定まりて苟も乱るゝこと無
かりしを今は混していひ分ち難々以ハ其々
の書と徴して多ッ一定むるなり
濁音の相混トとる者は

問 答

ヂジとヅズとちり是うちジズは少くして多く
そヂヅを又口調よりして濁音となる者は其

問

清音を知りてことを分つ可し
つゞけがらゝと至て口調と去るがひ異音と轉
をる者とは

答

これ二様あり一は詞の頭とら至て轉ぶる者一
は詞の腰脚とありて異音とうつる者なり

問

はトめの者は

答

ア列の音をオ列の音の如く呼ぶ者十個なり又
エ列の音を拗音と呼ぶ者なり

問

其一は

答

アの音をオの如く呼ぶ者なり
ハの音をフウの音の前よりありて
ハの音をオの如く呼ぶ者なり
ハの音をフウの音の前よりありて

其フウをオの如く呼ぶ時上の音が轉むるなり
下みを同ト今は實は正しく呼ぶものとして
はあらびオウの間の音を發する者なり

其二は

問 其の音をコの如く呼ぶ者なり 答 かつが 甲賀 かつ

ウベ首かうべ 神戸等の如く

其三は

問 其の音をソの如く呼ぶ者なり 答 さうま 相馬 さう

草紙等の如く

其四は

問 其の音をトの如く呼ぶ者なり 答 たふと 貴た

うめ專等の如く

其五は

問 其の音をノの如く呼ぶ者なり 答 ちうらひ 直會

ちうね 南畝等の如く

其六は

問 其の音をホの如く呼ぶ者なり 答 はふ 匍匐 はう

むる 葬はふ 祝部等の如く

其七は

問 其の音をモの如く呼ぶ者なり 答 ちうた 告白 ちうま

うけ 設まうど 望陀等の如く

其八は

答 ヤの音をヨの如く呼ぶ者を
ヤウかのひハ

日 ヤウクク漸等の如く

問 其九は

答 ラの音を口の如く呼ぶ者を
支那字音

まとは外國の詞のみならず本邦の詞も是

らう老らふ蠟等の如く

問 其十は

答 ワの音をヲの如く呼ぶ者を
こまも外國の詞

このみありて本邦の詞も一も是らわう王

予わうらい往来等の如く

問 拗音と轉むる者とは

答 エ列の音がウフの音の前より時拗音と轉

むるなりことは支那語をかり用る時多く

て元來の國語小はをくふ

問 國語の者は

答 ケの音をキヨと轉を けふ今日の如くセの音

をシヨと轉をせうと兄の如くエの音をイヨ

と轉をふふ醉の如く

問 支那字音の者は

答 エの音をイヨの如くケの音をキヨの如くセの

音をシヨの如くテの音をチヨの如くネの音を

ニヨの如くへの音をヒヤの如くメの音をミヨ

の如くレの音をリヨの如く呼ぶ者ありエウ要
 エフ葉ケウ橋ケフ狭セウ昭セフ妾テウ朝テフ
 蝶ネウ鏡ネフ檢ヘウ豹メウ妙レウ寮レフ獵等
 の如く

問 詞の腰脚ある音の異音轉むる者は

答 ハ行の音をワ行の音の如く呼ぶ者にして其數

五あり

問 其一は

ハの音をワの如く呼ぶ者 阿はぢ 淡路 かけら
 河原 いは 若さは 澤 等なま又才の如く呼ぶこと
 あり は けき 伯耆 の如く

問 其二は

ヒの音をホの如く呼ぶ者 くひもの喰物 又ひ
 ば 新治 かひ 貝 こひ 鯉 等の如く

問 其三は

フの音をウの如く呼ぶ者 ゆふがほ夕顔 っふ
 言等の如くまゐる再とび轉トくオの如く呼ぶ者
 あり けしぎ 扇 かとふ 通等をり

問 其四は

への音をエの如く呼ぶ者 かへまゐる 願を

問 其五は

へ教等の如く

答 ホの音を『の如く呼ぶ者』
北はく多かほ類等の如く

音便通音

問 通音とは

答 相近き音をあがひて通はして古來より用ゑられたる者として今二様につかひて孰れを正しとも誤りまりとも爲ざる詞なり

問 其相通ざる詞は

答 ゆく行とゆく行と
ゆめ夢といゆ夢と
うを魚といを魚と
われ吾とわを吾と

うきぎ光とをさぎ光と
えみ夷とえび良と
相通ざるが如く

問 音便とは

答 上古は詞の音便といふ者無かりしを中古支那語をまどへ用しより其字音の呼法おのづから我國語にも移りて音便といふ者起りたりをいち字音の長呼の引聲イウンと短呼の口内音との四韻と轉ざる者なり

問 イの音の轉ざる者は

答 キの音なりつき多ち朔をついとちさきはひ幸をさいはひさきくさ三枝をさいぐさかみかき

髮搔

をかうがふきがは吹革をふいかう等の

如し又イを加へ長く引きて呼ぶ者は志ド四時を志

つド志か詩歌を志ハが等あり

問 ウの音は轉むる者は

答 マミムハヒヘホクの八音をり又ツを加へて長

く引く者あり

問 マの音の轉むる者は

答 多まはり賜を多うばりハはイチタ御座をハは

さうをの多まふ宣をの多うぶ等をり

問 ミの音の轉むる者は

答 かみつけ上野をかうづけコみち小路をコうぢ

問 ムの音の轉むる者は

てみづ手水をしてうづかみかき髮搔をかうがひ
多、みがみ疊紙を多、うがみ等をり

ひむか日向をひうがむむのみ祢多武峯を多う

のみねさむらふ候をさうらふ等をいふなり

問 ハの音の轉むる者は

答 は、き篇をはうきふきがは吹革をふいがう等

なり

問 ヒの音の轉むる者は

答 からびつ唐櫃をかろうどハきびと商人をアき

うどおもひて思ヒテをオもウてとひて問ヒテ

をとうて志多^ガひて從^ヒテを志多^ガうて等^ヲを

問 へ音の轉むる者ハ

まへつぎみ公卿をまうぢぎみつかへまつる仕

奉をつかうまつる等たり

問 ホ音の轉むる者は

なほらひ直會をならひなほ^ハ直衣をなら^ハ等

たり

問 ク音の轉むる者は

わらぐつ葉履をわらうづよく能をよう^ハ拍手

悪を^ハ拍手^ハをさう^ハひやく^ハ拍手

をひやう^ハ等たり

問 ウ音を加へて長く引く者は

やかのひ^ハ日をやうかのひよさり夜去をよう

さり志か^ハて然シテを志かう^ハてよ^ハばう女

房を^ハよう^ハばう^ハふ^ハ夫婦を^ハう^ハ等たり

問 ンの音よ轉むる者は

ミムモニヌリルハヒホの十音なり又ンとムウ

とも二様^ハ轉むる音便^ハり又^ハンの音を加へて

聲を長く引く者^ハり

問 ミ音のン音^ハ轉むる者ハ

いみへ忌部を^ハん^ハべきみ^ハあち^ハ公等を^ハきん^ハあち

かみさし 髮刺をかんだしなみ多 涙をまんど
みて 讀ミテをきんで等なり

問 ム音のン音ヲ轉むる者は

答 ひむかー東をひんがーほむど 譽田をほんぶ等

たま

問 モ音のン音ヲ轉むる者は

答 ねむごろ 懇をねんごろをもち 汝をまんぢ等の

如シ

問 ニ音のン音ヲ轉むる者は

答 多又は 丹波をもんむなよけ 浪華をまんばなり

ど何ゾをなんぢつかく如何ニをいかん等なり

問 ヌ音のン音ヲ轉むる者は

答 みぬま 三瀝をみんまきぬがき 絹垣をきんが

等なり

問 リ音のン音ヲ轉むる者は

答 かりを假名をかんとやかりで 退出をちかんで

くどり 條件をくどん等なり

問 ル音のン音ヲ轉むる者は

答 ろるべー有ル可シをらんべーらるめり 有ルメ

りをらんめり等なり

問 ハ音のン音ヲ轉むる者は

答 わらはべ 童子をわらんべといふが如し

日本文典 卷一

問 ヒ音のソ音に轉むる者け

答 ちひとり 主水 をいんど おひをり 慮をおる
んをりる およびて 又ヒテ をおよんで 志のひて
忍ヒテ を志のんで ちらびて 並ヒテ をちらんで
等まり

問 ホ音のヒ音に轉むる者け

答 ほと呼と 殆を呼とんととツが如し
ソ音とウ音と二様ニ轉むる音便とけ
かみぬく 神主 をかうぬく かんぬく をみまを
そうををんを多かめま 荀を多かうを多かんを
ちきびと 商人 をちきうとちきんどつかへまつ

問

冠 ち仕奉をつかうまつつかんまつるかふり
をかうぶりがんむり等の如し
ソ音を加へて 聲を引く者とけ
寺を 真字 をまんをみる 南をみる をみぬきて
抽出 をぬきんで かぶる 鑑をかんがみびと 備後
をびんごぶじ 豊後 をばんご等の如し
短呼の口内音のツに轉むる者け
キヒナツリフの六音をり 又口内音のツを加へ
て 急促に呼ぶ者有り 共に詳し 前問の答にみえ
たり 参考を可く 七葉 右

問

日本書紀 卷之...

延言約言畧言

問 延言とは

答 詞のミトかくして口調のわろき時延べて去らべをとりよく整ふる為め用るなりこれ五十音圖の縦横に通へるおのづからき定まり何れども初學は遠ざきとり難ければ今け其詞の一ニを擧げて他日の基礎とすを

問 其詞を示め

答 其詞を示めセ
み見るをみるこふる戀フルをこふらく何らぬ有ラヌを何らなくうつる移ルをうつらふ等をり

問 約言とは

答 詞にまりて去らべのき時約めてと、のちる者まりこれけ詞の二つ重りてひとつ詞の如くまりたる時第二の詞の上の音がア行の音を了る時多くありきしらげ差上をき、げ何らいら 荒磯を何りろかはうち 河内をかふち何はうみ 淡海を何み等きり

問 畧言とは

答 延約の法をか、はらだして詞のうち、輕き音を畧きて去らべを去る者をいひきり假令ばいきたぎ引剩をひきたぎらみひき 網引をらびき志

かかれハ然有ルハを志かれバ所ウノ明石を
所カトトヨウラ豊浦をトモトヲツウラ松浦を
ヲツラ等ナリ

小學 日本文典卷一終

小學 日本文典卷之二上

春山弟彦 著

詞法

問 詞法とは

答 詞の品種を分ちて其性質主用變化等を示め
法をいふなり

問 詞の品種は共ニ幾類ニ分ツ

答 八種ナリ 第一名詞 第二形容詞 第三代名詞 第四
動詞 第五副詞 第六後置詞 第七接續詞 第八感詞

問 名詞とは

答 有生無生の別をく萬物の名目を示す詞なり又

無形の者といへども人意の中ニ事物とを以て
示を詞をいふ

問 形容詞とは

答 事物の形状性質をいふは物體の數目を示を詞を

問 代名詞とは

答 文章の中ニ同一物名の幾回もいふはとておづら

はしき時ニ思ひを勞し考を紊ることからしめ

むがとめし其物名を換ふる簡短なる詞をいふなり

問 動詞とは

答 事物の動作を示を詞を

問 副詞とは

副詞とは

答 動詞の示したる動作形容詞の示したる性質形

状を精密に示さむことを要する時ニ其期限位

地状態等を審定するめし用る詞を

問 後置詞とは

答 名詞と名詞との關係を示したるひは名詞と動

詞との關係を示して多くは名詞の位地作動の

期限を審定する者なり又名詞の格を示る者ら

りをへてこの詞は名詞の後たるを以て後置

詞と名づく又名詞の格を指し示を詞を以

て指示詞といふ

問 接續詞とは

答 詞を接ぎ句を合せて章句を相接続せしむる詞
まり

問 感詞とは

答 感慨嗟歎を示す詞まり又物の音響を記しつる
ひハ歌曲の餘韻を記する等をべて不意に發し
て意義なき詞けみまこととよ屬を可し

名詞

問 名詞とは

答 天地の間々現はるゝ、総ての事物の名目まり有
形の者あり無形の者あり本名の者あり通名の

の者あり他詞をり轉々来る者あり集合してま
る者ありさて又この名詞には數と格とをもつ

問 有形の者とは

答 一日つき月ほし星つち地ひと人けもの獸とり
鳥うを魚き木くさ草うめ梅まつ松等の如く形
の有る物の名まり

問 無形の者とは

答 人の想像の中々摸生たる一個の形なき事理を
形體らる者の如くこま小名を命ト多る者まり
てこまを想像名詞とわふまりこと事わさ業と

問 本名の者とは 言語 ち智おむ仁 ちゆう勇等の如し

答 一人マかぎ一物ノ属をる名稱をり 頼朝秀吉

鎌倉右大臣御堂関白武藏播磨江戸大坂高砂の

松千鳥の香爐等の如し

問 通名の者とは

答 諸物ノ涉り或は同類ノ相通をる詞をり ひと人

く、國やま山かけ川き木くさ草とり鳥けもの

獸等の如し

問 他の詞より轉ト来る者とは

答 動詞のるひは形容詞の轉トて名詞とをる者

一て六種あり

問 其一は

答 動詞より来る者として其動詞の詞尾をイ列又

はエ列の音ノ取る者たり 衣をはちゆき行た

推うち撃らひ逢をみ住つ里釣たき起たる落の

ひ延うらみ恨たい老れま下え得うけ受やせ瘦

をて捨か祓兼ほめ譽おきまへ 辨きえ消かき枯

うる飢い射き着る似ひ乾み視る居等の如し

問 其二は

答 動詞の後ノコトありひけモノといふ詞を加へ

て名詞とをる者たり 衣をはちゆくこと行た

日本書紀 卷二上

をこと推¹うつこと撃¹つふこと達¹をむこ
 と住¹つること釣¹たくること起¹たつること
 と落¹のゆるもの延者もちろるもの用者等の
 如く動詞の詞尾をウ列の音¹取りてコトモノ等の
 詞を加ふるをり又逃せけこのコトモノ等の詞
 を省きて直¹ゆく行ねを推¹うつ撃とのみひ
 て名詞ときをことわりて
 其三け
 形容詞より来る者¹て¹何か赤¹何を青¹何さ¹淺
 何か深¹等の如¹
 其四け
 問

答 形容詞の後¹サといふ字を加へて名詞ときを
 者¹より¹多¹か¹き¹高¹サ¹ひろ¹き¹廣¹サ¹ひろ¹き¹厚¹さ¹何か
 深¹サ¹等の如¹
 其五け
 形容詞の後¹ミの字を加へて名詞ときを者¹
 り¹多¹か¹み¹高¹ミ¹ひろ¹み¹廣¹ミ¹何¹つ¹ミ¹厚¹ミ¹なが¹み¹長
 ミ¹何¹か¹み¹赤¹ミ¹くろ¹み¹黒¹ミ¹等の如¹
 其六け
 形容詞の後¹ゲの字を加へて名詞ときを者¹
 り¹つ¹と¹げ¹強¹ゲ¹た¹も¹げ¹重¹ゲ¹か¹ろ¹げ¹輕¹ゲ¹等の如¹
 集合して来る者とは
 問

日本文典 卷三 上 五

答 二個以上の詞の集りて成る者としてこれを集
令名詞といふ其類五つあり

問 其一は

答 二個の名詞相重りて二個の意義を去る者なり
を去はちつち天地 つきひ日月 松やこ父子
いもせ夫婦等の如く

問 其二は

答 二個の名詞相重りある時上の詞は形容詞と
をりて下の詞の性質形状を示る者去りかけみ
づ河水 いーげー石橋 きざら木皿 等の如く又地
名人名を上置きて其産出の地製造の人をり

問 らはを者をりを去けちふかくさうちは 深草園
扇 ひめちかけ 姫路華 六兵衛やき 陶器 等をり

問 其三は

答 二個の名詞を重ねある時上の名詞の終の音を
轉じて重ぬる者なりこまゝ甲乙丙丁戊の五法
あり

問 甲法の者け

答 エ列の音をア列の音と轉じて重ぬる者なり
けや酒家をさかやかぜをヤ風早をかざけやて
まくら手枕をあまくらの稲多 稲田をいさおを
へいろ苗代をまけいろわぶら目輪をまぶちび

えみづ 冷水をひやみづかきをぎ 枯萩をからを
ぎこまぶか 聲高をこわぶか等の如し

問 乙法の者は

答 イ列の音をウ列の音に轉ぶる者なり

つきよ 月夜をつぐとよぼこ 瓊牙をぬぼこかみ
ぬし 神主をかむぬし等の如し

問 丙法の者は

答 丙法の者は

イ列の音をエ列の音に轉ぶる者なり ちけき
帯刃をちてはき いきかき 生垣をいけがき等の
如し

問 丁法の者は

答 丁法の者は

問

答

イ列の音をオ列の音に轉ぶる者なり きのき 木
間をこのまうがき 荷前をのぞきひかげ 火影をほ
かげ等の如し

問 戊法の者は

答 戊法の者は

オ列の音をア列の音に轉ぶて重ぬる者なり
ろやき 白山をいらやきみのと 水ノ門をみちと
みのくち 水ノ口をみちくち等の如し

問 其四は

答 其四は

三个以上数个の名詞相重して数个の義をなす
者なり ちきけちつきやきはな 雪月花をちつげつ
せの日月星とうぎのちんぼく 東西南北をさいげ

つぎつと歳月日時等の如し

問 其五け

答 反対の意義ある動詞あるひは形容詞の二個重

きて一義をきいて名詞とある者ありききはち

ありはづき 當否 ゆきかへり 往復 ありさが

昇降 多かびく 高低 多てとと 縦横 かみりも上

下等の如し

問 名詞の數とけ

答 單數すとは複數の名詞をいふきり

問 單數の名詞は

答 一個の物品を指して其名をいふ時とれを

單數といふをきはち人獸事物の名詞を其まじ

し用るなり

問 複數の名詞とは

答 二個以上のおきし物品を指して呼ぶ者ときを

複數の名詞と名づくこの名詞を作るに甲乙の

二法あり

問 甲法の者は

答 名詞の後ニタチトモラ等の字を加へて複數を

あらはる者ありともおち友ガチきみもち君タ

チことども兎トモラともとらるも其許トモ

しども私トモちむちら汝等等の如し

問 乙法の者け

答 ねをト名詞を二介かさねて複数をいれけを者
きりひととて入々むらゝと村々いへと家々
等の如し

問 名詞の格とけ

答 名詞の互に相關しつらひは動詞と關係をる時
其文の趣旨と去るがひつらひは主とたりら
るひの客とたりて其需用と適合しるる務めを
達する者ととを文よりけしと名詞の格とい
ふ多くは其名詞の後で後置詞と名づくる詞を
加へて其格を定むるきりときを三種に分ち主

格物主格 目的格とを

問 主格とけ

答 人獸事物の名が獨立して文主とたり文句中に
いれはるゝ時はとを主格とをこの文主と於
ては自動の状態他動受動の作業等の事を記す
可ききり 人が語る 母が児を育ふ 犬が打
るゝ等の如しさてこの格と十體あり

問 其一は

答 名詞が句頭よりりて後置詞を加へてして文主
とより者たりこの格は自動詞と結合する時か
らりひは直に副詞の前よりり時か多し

年ふちいけり 夏来いけら
人たり 君ち
り ぬきはちほど恐る 兒よく眠る等の如し

問 其二は

答 カの後置詞を加ふる者なり 生徒が書をよむ

小兒か寝むる 花がさく 風がふく等の如し

問 其三は

答 ノの後置詞を加ふる者なり 花のちる

春の来る 日の出づる 月の入る等の如し

問 其四は

答 ズの後置詞を加ふる者なり 梅がかをさる

雁が鳴きさる 思ふささる等の如し

問 其五は

答 ナムの後置詞を加ふる者なり 住所をん入間

の郡みとー野の里をりける 母をん藤原をり

けり等の如し

問 其六は

答 コソの後置詞を加ふる者なり 人ころ見えぬ

秋こそ来ぬま 我こを行かぬ等の如し

問 其七は

答 ハの後置詞を加ふる者なり 海は深かり

山けふかり 鳥けさく 花はさく 君子は徳

日本書紀 卷之三

問 たり 朋友は信たり 善は正たり 人は萬物の靈ちり等の如し

其八は

答 モの後置詞を加ふる者たり たりぬ降りかぜ 吹く 酒もほし餅もほし 夏も涼しく冬も たりぬかちり等の如し

其九は

問 其九は 十の後置詞を加ふる者たり 君や来し吾や行 かけむ 人やまゝ 鶯やまゝ 脩身の道 たりぬや善を行ふより 梅さくや 月すつや 等の如し

其十は

問 其十は 十の字を加ふる者たり 君よ来ま 花よさけ

答 ヨの字を加ふる者たり 鶯と鳴け等の如しこのヨの字はとと招呼の

感詞をきども名詞の後より置きて對話の文より用るをり

物主格とは

答 物品のちち主をたははたり作業の人をたははたり事物のちち主をたははたり種類をたははたりと其分量をたははたり総て名詞と名詞との

互の關係を示めたる者たり 義家の旗 秀吉の

城 定家の色紙 貫之の歌 正成の戦功

商社の計算 政府の吏務 華族の人 萬里の

日本書紀 卷之三

海程 數株の松 尺寸の微忠等の如くさてこの格より三體あり

問 其一は

答 〆の後置詞を加ふる者なり 國の民 河の水

八郎の弓等の如く

問 其二は

答 〆の後置詞を加ふる者なり 君が世 汝が家

梅が枝 鴈が音 賤が嶽 鐘が淵 月が瀬

乳母がもち等の如く

問 其三は

答 後置詞を加へてこの格をらげたる者なり

石橋等の如く 谷川やつば松葉きざら水 いは

問 目的格とけ

答 動詞に屬する名詞より其名詞が動詞の作

動の目的となる者なり假令ば 小児が書をよ

む 書生が學校に参る等の文に於て書らるひ

は學校といふ名詞がよむらるひは参るといふ

動詞の目的となるなりこの格より四體あり

問 其一は

答 二の後置詞を加ふる者なり 天皇陛下は東京

よりやちて人民は君長に順ふ 地球は一晝

日本書紀卷之三

夜一轉を等の如し

問 其二は

答 への後置詞を加ふる者なり 我はは東京へ上

らむ 我はは近日大阪へ来らむ 君は長寺へ

行かむとて廣嶋といふを等の如し

問 其三は

答 への後置詞を加ふる者なり 小児が書をよむ

善人は徳を脩む 天は人を助く 等の如

問 其四は

答 ヨリの後置詞を加ふる者なり 鶯は谷より出

づ 鶏は曉より鳴く 君は東海道より江戸へ

ゆく 吾は中山道より京都へ上らむ 等の如し

形容詞

問 形容詞とは

答 名詞のほらばトふる動植事物の性質形状を示

やも者として本来の者なり他の詞より轉ト来

る者なり詞尾を加ふる者なり助動詞を加ふる

者なりをへて名詞の前より置くを常とて名

詞の後より置きて動詞の如く用る者なり數量を

示る者なり順序を示る者なり比較の級を示る

川谷

者なり

問 本来の者とは

答 其詞の性質もとより形容を摸し出さることを以て主旨とせし者にしてこまに他の詞に變ぜざる者と變ぜざる者との二種あり

問 他の詞に變ぜざる者とは

答 小野のを 眞竹のを 眞砂のを 小川のを
みやま 深山 御酒 小川
の三芳野のみ さよ 小夜 さゆ 白湯 さむし
のさ 小松 こい 小島 のこ 等の如し
こまらはると名詞を鄭重しひらけらるる

ひは愛翫の意をあらはせんとせし時、冠らるるむる詞にして詠歎の趣味を表せし者多きは多しを冠詞といふ可く感詞といひて可からべし

問 他の詞に變ぜざる者とは

答 ほか 赤いろ 白くろ 黒あか 高ひろ 廣ら 甘から 辛等は本来の形容詞なりさまどもこまを名詞の位に置けば詞尾を加えて直らるる名詞となり又此等は本来の形にキミ 甘等の字を加へて名詞とせしことあり あかき 高き ひろき 廣し 甘み 甘等の如し

問 他の詞より轉ト来る者とは

答 本来の名詞は動詞より来りたる名詞を

其の、一詞尾を加へて形容詞となりて用

る者なり其法集合名詞の第二と同ト ひば

火箸 てつびん 鐵瓶 ちやわん 茶碗 くひもの 喰物

よみほん 讀本 等をり

問 形容詞の詞尾とは

答 キケキシキラシキ等なり形容詞の變畫圖をみ

問 キの詞尾は

答 こまはもとクシキサミケレと轉トて形容詞を

助くる一個の活語をりろのキニ轉むる時は名

詞の前ニ適合し シ なるひはケレニ轉むる時は

名詞の後ニ適合して其形容を ラ は ク 轉

むる時は形容詞なるひは動詞の前ニ位して副

詞となりサ ラ なるひは ニ 轉むる時は名詞とな

るをりさてこの時の詞尾を用る 一 甲乙の二法なり

問 甲法の者は

答 本来の形容詞ニ加ふる者なり ラ を キ 青キ

ラ を キ 赤キ ヨ を キ 善キ コ を キ 濃キ ウ を キ 薄キ オ

キ 高キ ヒ を キ 廣キ チ を キ 繁キ ヌ を キ 温キ カ

キ 固キ ヨ を キ 憎キ イ を キ 痛キ 等をり オ 副詞

ゝ加へて形容詞の如く用ゐる者なり
ごとき如
キなき無キ等の如し

問 乙法の者は

答 シゝ終りたり形容詞たりひは動詞ゝ加ふる者

なり
よろしき宜きうつくしき美キ
多のしき

樂キ
かなしき悲キ等なり

問 ケキの詞尾は

答 こまはケクケシケキケサと轉トて形容詞を助

くる詞あり
はるけき遙ケキ
あづけき静ケキ

等の如し

問 シキの詞尾は

答

シシキシケレシクシサと轉用をる詞ゝして形

容詞副詞動詞等を受け名詞の前たりひは後

たりて其形容を示る者あり
こまゝ甲乙丙の三

法あり

問 甲法の者は

答 動詞ゝ加へて形容詞と志る者なり
きはがしき

噪キ
うまがはしき疑キ
このましき好キ
おろろ

しき恐キ等の如し

問 乙法の者は

答 本来の形容詞たりひは名詞のおまゝ詞を二介

かさねて詞尾を加ふる者なり
まがらばしき

永々シキ 二ぎこまーき 賑々シキ ことごとくーき
 事々シキ ルのゝゝーき 物々シキ はまごゝーき
 晴々シキ 等々り

問 丙法の者は
 答 副詞に加ふる者あり 是はがーき 甚シキ いか

問 副詞に如何シキ等々り
 答 副詞に如何シキ等々り

問 ラシキの詞尾は
 答 ラシキの詞尾は

問 詞に加て其恰好の風致をあらはせる者あり
 答 詞に加て其恰好の風致をあらはせる者あり
 ちとこらーき 男ラシキ をむちらーき 女ラシキ
 からいらーき 可愛ラシキ 等々り

形容詞の變畫圖

	ケキ	キ		
甲法の者		乙法の者	甲法の者	
好まーき 噪がーき 静けき 遙けき	好まーき 噪がー 静けー 遙けー	美ーき 樂ーき	赤ーき 高き	名詞の前 適合する者
好まー 噪がー 静けー 遙けー	好まー 噪がー 静けー 遙けー	美ー 樂ー	赤ー 高ー	名詞の後 適合する者
好まーく 噪がーく 静けく 遙けく	好まーく 噪がーく 静けく 遙けく	美ーく 樂ーく	赤く 高く	副詞と なる者
好まーさ 噪がーさ 静けさ 遙けさ	好まーさ 噪がーさ 静けさ 遙けさ	美ーさ 樂ーさ	赤さ 高さ	名詞と なる者

ラシキ	シキ	
	丙法の者	乙法の者
可愛らしき	如何しき	甚しき
男らしき	如何しき	晴々しき
可愛らしき	如何しき	賑々しき
男らしき	如何しき	晴々しき
可愛らしき	如何しき	賑々しき
男らしき	如何しき	晴々しき
可愛らしき	如何しき	賑々しき
男らしき	如何しき	晴々しき

問 助動詞を加ふる者とは
 答 ナルタルの二詞より助動表甲第四轉と参考を
 問 ナルの助動詞を加ふる者とは

答 四段活用の助動詞よりてナラナリナルナレと
 轉ざる詞より其形容を何らはる者より甲乙の二
 體あり
 問 甲の者は
 答 本来の形容詞より加ふる者あり 黄なる色
 こまやかなる花 かまくちなる人 じぎやか
 なる家等の如し
 問 乙の者は
 答 名詞にらるひは支那語より加へて形容を示る者
 あり 東京なる人 播磨なる女 忠義なる臣
 孝順なる子 聡明なる君主等の如し

問 タルの助動詞を加ふる者は

答 ラ行四段活用の助動詞にて其形容をあらは

る者一甲乙の二體あり

問 其甲は

答 動詞の詞尾をイ列の音かエ列の音か取

この助動詞を加ふる者なり 學びある人

よみある書 落ちある菓實 老いある男

流きある水 やせある狗等の如し

問 其乙は

答 支那語の形容詞にて用ふる者なり 湯々ある

洪水 四門穆々あり 吻々たる鹿鳴 窈窕と

る淑女 参差ある葎菜 桃の夫々たる其葉萎

々たり等の如し

問 名詞の後置きて動詞の如く用ふる者は

答 シケレシケレの詞尾を加ふるをあらはしはナリ

タリの助動詞を加ふる者ありをあらはしは 心付

清し 人ころよけき 花こそ美しけき 道は

るかぎり 緑竹倚々たり等の如し

問 数量を示す者は

答 形容詞の中ら数量をあらはす者なりとを數

形容詞といふ共ニ種々分つて一を定數といひ

一を不定數といふなり

問 定数とは

答 名詞の前あるいは後よりりて其分量を精しく示す詞として原数の者より轉來の者より合併の者よりりて其用法もまた一をらむ

問 原数とは

答 ひとつ ふひとつ ニみつ 三よつ 四いつ 五かつ
六よつ 七やつ 八こつ 九とを 十も 百ち
千よろづ 萬のち 一は 二よ 三さん 四一五
ご六ろく 七いち 八はら 九く 十トよ 百ひやく 千
せん 萬まん 等の根原の数をいふなり
問 轉來の者とは

答

ソッダホ等の字を加へて原数より轉ト來る者
ちりちちはち みる 三十よろぢ 四十むろぢ 六
十のほ 五百やほ 八百等の如し

問

合併の者とは

答 原数を合併して成る数をいふなり 十一トよ
のち 二十三トよさん 六十五ろくドよど 百五
十四 ひやくどトよい等の如し

問

定数の用法を示せ

答 名詞の前よりる者は甲乙丙の三法に分つ其名
詞の後よりる者は直ちよ名詞の次より位して別
る説らふしを要せむ

問 甲法は

答 直ち名詞の前を置く者なりをまはち ひと

つ 一星 ふとつ ふち 二丸 みつば 三葉 よつ

乙法は ト 四辻 ちひろ 千尋 よろづ よ 萬世 等の如し

問 乙法は

答 ヲの字をけおきて名詞の前を置く者なりをまはち

はち ひと もぢ 一線 お お や 父母 み 一 ま 三品

丙法は ま く さ 七草 こ の ふ び 九 四 等の如し

問 丙法は

答 の字を加へて名詞の前を置く者なりをまはち ふ と つ の い へ 二 家 よ つ の は ま 四 出 花 等の

問 甲法は

答 直ち名詞の前を置く者なりをまはち ひと

つ 一星 ふとつ ふち 二丸 みつば 三葉 よつ

乙法は ト 四辻 ちひろ 千尋 よろづ よ 萬世 等の如し

問 乙法は

答 ヲの字をけおきて名詞の前を置く者なりをまはち

はち ひと もぢ 一線 お お や 父母 み 一 ま 三品

丙法は ま く さ 七草 こ の ふ び 九 四 等の如し

問 丙法は

答 の字を加へて名詞の前を置く者なりをまはち ふ と つ の い へ 二 家 よ つ の は ま 四 出 花 等の

如し又其名詞が人品をきく時はり ひ は タ リ

の字を加ふる ひとり じ 一 子 ふ と り の と

も 二 支 み と り の ひ と 三 人 等 の 如 し

不定數とは

答 定限をく大概の數を示す詞をり と ま よ 四 種 の

問 其一是

答 ひろく總數を示す詞をり み を 皆 た の と り 各

は ろ く 總 數 を 示 す 詞 を り み を 皆 た の と り 各

は ろ く 總 數 を 示 す 詞 を り み を 皆 た の と り 各

問 其二是

答 多分をり と ま よ 四 種 の 如 し

どる時₁用₃者₂を₁を₁は₁ち ねほき多₁といへる詞₁を₁り

問 其三は

答 其數の少₁分₁を₁る₁こと₁を₁知₁るといへど₁も₁あ₁く₁は

定₁や₁ら₁ざ₁る₁時₁用₃詞₁を₁り₁を₁は₁ち ち₁く

き₁き₁ッ₁わ₁づ₁か₁を₁る₁僅₁十₁ル₁い₁さ₁く₁か₁若₁等₁の₁如₁く

問 其四は

答 數量の分₁明₁を₁ら₁ざ₁る₁時₁問₁か₁く₁る₁詞₁を₁り₁を₁は₁ち

は₁ち₁い₁く₁幾₁い₁く₁ら₁幾₁い₁く₁つ₁幾₁ッ₁等₁の₁如₁く

問 順序を示₁を₁者₁とは

答 事物の階₁級₁の₁逐₁次₁進₁退₁を₁る₁位₁次₁を₁示₁を₁詞₁を₁り

して甲乙丙丁の四法₁を₁り

問 甲法の者は

答 定數の後₁メ₁の₁字₁を₁加₁へ₁て₁順₁序₁を₁ら₁は₁は₁者

を₁り₁ひ₁と₁つ₁め₁ふ₁も₁つ₁め₁十₁一₁や₁百₁二₁十

め₁三百₁五₁十₁三₁や₁等₁の₁如₁く

問 乙法の者は

答 支₁那₁語₁の₁數₁字₁を₁用₁る₁法₁を₁して₁定₁數₁の₁前₁の₁第₁の

字₁を₁加₁ふ₁る₁者₁を₁り₁第₁一₁第₁二₁等₁の₁如₁く

問 丙法の者は

答 定數の後₁番₁の₁字₁を₁ら₁は₁は₁番₁目₁の₁字₁を₁加₁ふ₁る

者₁を₁り₁一₁番₁二₁番₁三₁番₁一₁番₁目₁二₁番₁目

等の如し

問 丁法の者は

答 定数の前1第の字を置き後2番の字は

番目の字を加ふる者なり 第一番 第二番

第三番目 第四番目等の如し

問 比較の級とは

答 土地人物等の形容1就きて此彼二者の比較を

示を者をつかきこの法甲乙の二つり

問 甲法の者は

答 二物相比して其一の者が他の者の上級より

ことをあらはせる者として形容詞の前より

字を加ふる者なり 櫻は梅より美しくき花なり

り 金は銀より大なる價直なり 人は禽獸より

尊し等の如し

問 乙法の者は

答 一物をして同類の他の物より獨をいさむる事

を示を時あらはるひは劣りとする事を示を時かよ

形容詞の前よりトモ最ハナハダ甚ゴク極シゴ

ク至極イタリテ至テ等の詞を加ふる者なり

東京は最大なる都府なり 楠公は甚忠義なる

人なり 蠶はいもりて小なる獸なり 美濃紙

はごく強き紙なり 尊氏はごくいらしき人なり

の等の如し

代名詞

問 代名詞とは

答 一の文章の中より於て同じ名詞をいばると重複して出た時は其行文煩雜にして混亂を生むることあり故より一種簡約なる詞を以て其名詞と代て用る者これを代名詞といふなり其類五より名詞と同トク数と格とを以つ者なり人代名詞物主代名詞疑問代名詞復歸代名詞指示代名詞等なり

問 人代名詞とは

答 人名より代する詞にして第一人稱 第二人稱 第三人稱の三種とを

問 第一人稱とは

答 對話よりたりて其演説する人の名より代する詞にして己の名より代する者なりとを單複の二数あり

問 單数の第一人稱は

答 我 我 我 我 多 多 私 やつが 僕 此方 せつーや 拙者 ぼく 僕 等 等 等 等

問 複数の第一人稱は

答 我 我 我 我 多 多 私 やつが 僕 此方 せつーや 拙者 ぼく 僕 等 等 等 等

問 第一種の者は

答 近き所をばらる者をさして言ふ時、用る代名詞
をばらるる者なり。こは人なり。こ
を父といふ等の如し。

問 第二種の者は

答 遠く隔たりとる人をさして言ふ時、用る詞を
ばらるる者なり。彼は彼方等の詞よりて
かまが書をよむをきけ。ははは官吏なり等の
如し。

問 第三種の者は

答 近き者と遠き者との中間をばらる者をさして示

を時、用る代名詞なり。其は其等よりて
をばらるる者なり。こはこをよき人なれ等
の如し。

問 第三人稱の三種の用法を示せ

答 義経は頼朝の弟よりて義朝の子なりといふ文
を代名詞より代て。こは第一種はをま 第三種の
弟よりてかま 第二種の子なりといふが如し。

問 物主代名詞とは

答 物品の持主をばらるはを時、其持主より代る詞
よりて人代名詞よりばらるひはがの後置詞を加
て物主格を作るなり。

問 疑問代名詞とは

答 對話に於るひは文章に於て其きりて説き出さむ
とをる者の疑いくして分明に知まざる事物を
尋ね問ふ時其事物の名を代へて問ひかくる詞を
まことまは五種あり

問 第一種の者は

答 まは 何といふ詞なりこまは事物の性質品類等
の全く知まざる時用る者なり

問 第二種の者は

答 まは 誰といふ詞なりこまは人なることを知り
て其名の知まざる時用る者なり

問 第三種の者は

答 何といふ詞なりこまは同類に於るひは
一局部に於て其大畧は知り得るまは其まは
所の一物の定めをらざる者を問ふ時用る詞
なり

問 第四種の者は

答 何といふ詞なりこまは時限の知まざる
時用る者なり

問 第五種の者は

答 何といふ詞なりこまは位置
の知まざるを問ふ時用る者なり

問 復歸代名詞とは

答 人獸事物の作業其動作をる者をもはち文主より復歸する時を用る者よりて共々二種あり

問 其一は

答 其のま己みづから自等よりてこそを本来の者とを 子ある者は其父母の己を教ゆることを好むは其務の一なり 人の虚言をかふるはみづから欺くより等あり

問 其二は

答 我をむぢ汝等よりて人代名詞の第一人稱第二人稱より来る者あり 我は我を愛む

汝は汝を愛む可也等の如く

問 指示代名詞とは

答 名詞の前よりて手指を以て指をが如く事物を示す時を用る詞をり其用法形容詞より同一故に之と指示形容詞と名づく其類四あり

問 其第一の者は

答 この此の其かの彼等の詞をりこそは一物一事を分明に指し示す時を用る者よりてこの人をもその所を居らしめてかの事を學ばしめよこの書生はかの學校に在りてその業を勉む等の如く

小學
科用
日本文典卷之二上終

